

博物館だより

第83号 2012.9.28



▲牧島村絵図（国文学研究資料館蔵・真田家文書）



▲牧野島城跡と城下町

魂を運ぶ土器、再生を願う土器

土器というと、ものを煮炊きする鍋や、ものを貯える壺といった日常生活に使用するものが一般的ですが、時には現代のわれわれには、なかなかその使い方がわからないものが出土します。今回はそんな土器2点についてご紹介します。

篠ノ井の塩崎遺跡群伊勢宮遺跡では、今からおよそ2,200年ほど前の弥生時代中期前半の木棺墓が30基ほど見つかっています。中でも第21号木棺墓からは副葬された土器が10点出土しています(写真3)。

いずれもものを貯える壺形土器の仲間ですが、特徴的な土器が2点出土しています。

写真1は高さ10cm、胴部最大幅20cmを測り、横から見ると逆台形状の胴部の一端に、筒状の口縁部がつく形状をしています。胴部にはヘラによって、羽状の文様が描かれ、頭部の表現はないものの、胴部から直線的に伸びる首は水鳥を表現している鳥形土器と考えられます。

写真2は高さ20cm、最大幅7cmの丸い筒形土器で、ヘラによって描かれた文様はまさに男根を表現しているものと思われます。

さて、この二つの土器はそれぞれ何に用いられた土器なのでしょう。このなぞを解くヒントのひとつに土器の出土状態があります(写真4)。出土した10点の土器のうち、鳥形土器だけが埋葬された人物の胸の辺りに置かれ、他の9点はいずれも足元に集中しておかれて

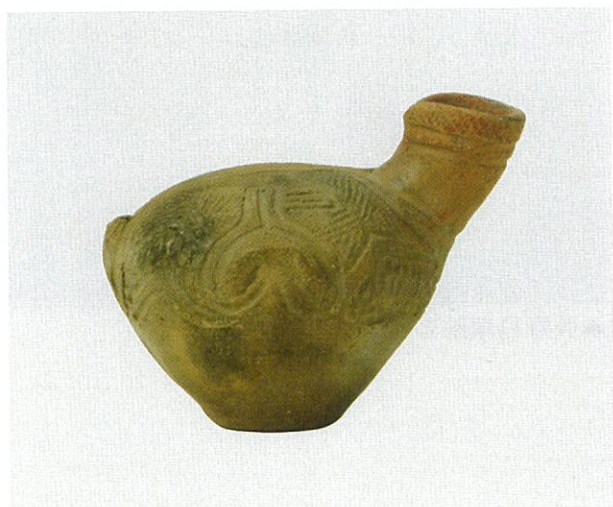
いたのです。この状況から鳥形土器は他の土器とは明らかに区別されていたことが推定されます。

神の国が天上にある場合も、海のかなたにある場合も、空を高く遠く天翔ける鳥が、神の国と人の世の仲立ちをする使者であるとする素朴な信仰は世界中に認められます。この鳥形土器も死者の魂をあの世に送る運搬者だったのでしょうか。

では筒形土器はいったい何なのでしょう。鳥形土器のような特殊な取り扱いはされていなかったものの、男根を模していることから、そこには死者の再生や新たな生命の誕生への願いが伺えます。

それでは、魂を運ぶ土器、再生を願う土器が副葬されていたこの墓の主はいったいどんな人だったのでしょうか。遺体は東に頭を向けた屈葬で葬られていましたが、残念なことに骨の遺存状況は悪く細かなことまではわかりません。

ただ、残っていた歯の分析から、10代半ばの男性と推定されています。栄養障害や病気などのストレスによって引き起こされる歯の石灰化不全であるエナメル質減形成がほとんどの歯に認められ、幼少期に何回かの強いストレスを受けていることが指摘されています。さらに10代半ばにしては歯の咬耗が少ないこと、四肢骨がさほど太くないことから、かなり虚弱な体質であったと想定されています。幸



▲写真1：魂を運ぶ鳥形土器



▲写真2：再生を願う筒型土器

少なく若くして逝った少年を弔うために、手厚い葬儀が行われたのでしょうか。

歯の分析からはさらに特徴的なことがわかっています。歯の特徴が土着の縄文時代人とは大きく異なり、シャベル型の上顎切歯^{じょうがくせつし}を持っている点や歯の大きさで渡来系の弥生人である可能性がかなり高いものと推定されています。

伊勢宮遺跡の他の木棺墓でも分析可能な8個体のうち、土着的な特徴を持つのは2個体のみであり、残りのうち2個体はやや渡来系的、4個体は渡来人の特徴を強く持つという結果が得られています。

弥生時代中期前半という時期は、善光寺平

へ稲作が伝わり、米作りが定着する段階といえますが、伊勢宮遺跡の木棺墓に葬られた人々は、米づくりを伝えた人々やその子孫である可能性が高いのです。鳥に対する信仰は弥生時代になって大陸から新たに日本へ伝えられた信仰ですが、こうした新たな信仰も彼らによって、米作りとともに善光寺平へ伝えられたのでしょうか。

魂を運ぶ鳥形土器と、再生を願う筒形土器は常設展示室1階の「弥生人の暮らし」のコーナーに展示しています。弥生人の祈りや願いに思いを馳せてみてはいかがでしょうか。
(千野浩)



▲写真3：伊勢宮遺跡 21 号木棺墓に副葬された土器



▲写真4：21 号木棺墓土器出大状況

和紙を介した 西山地域と町とのつながり

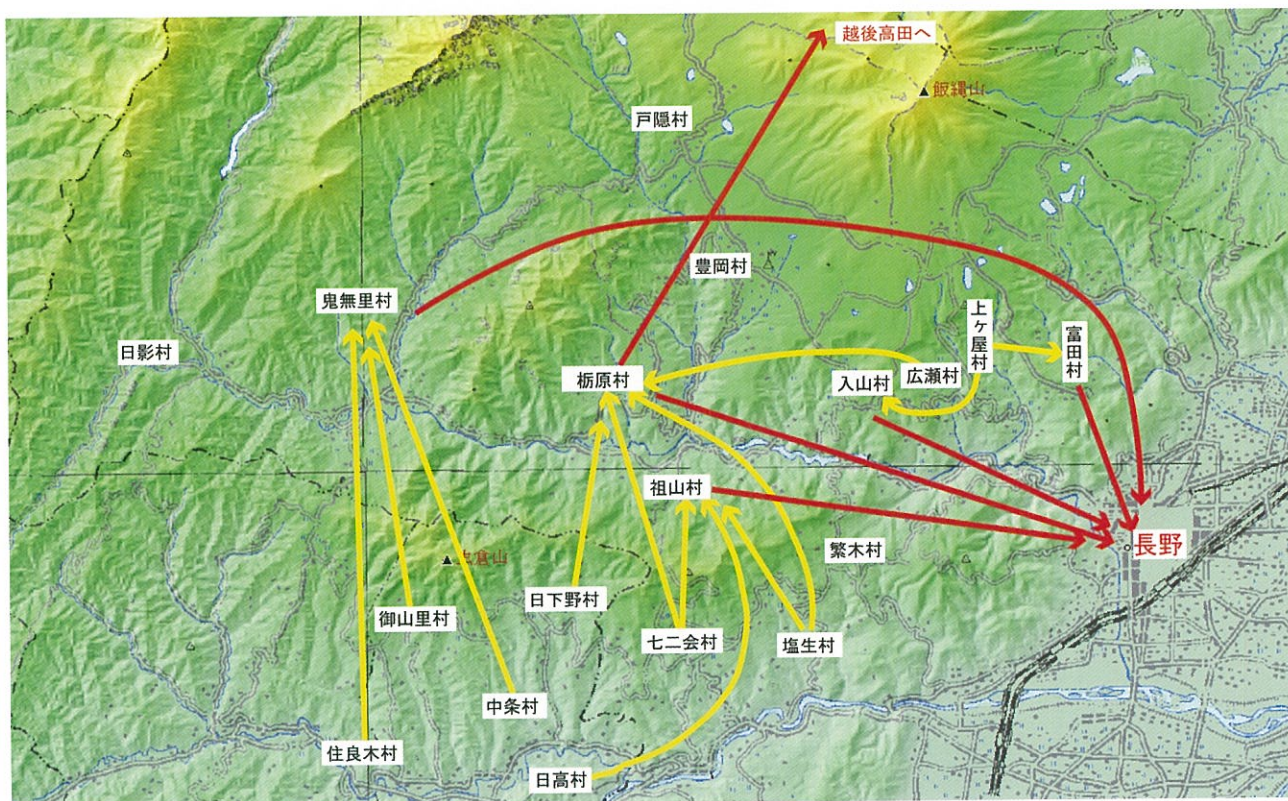
近世から近代にかけて、通称「西山」と呼ばれる長野市西部の山間地は、長野盆地の平野部に比べ平地が少ないため水田が少なく、米の収穫が少ない地域でした。しかしその代わりに山から採取する木材や漆といった林産物や、水田ほどの整備が必要なく作れる麻や紙といった多様な商品作物を生産することで生計を立てていました。

明治10年代に県内の各村が役所に提出した村の明細帳をまとめた『長野県町村誌』には西山地域の村々から、味噌や醤油の原料にもなる大豆、当時の照明の燃料の元となる菜種、藍染の染料植物である藍、縄や畳糸、蚊帳などの製品とその原料となる麻糸・和紙といった産物が長野町へ輸出されていたことが記されています。これらの産物の中で特に和紙は「山中紙」と呼ばれ、近世には松代藩の御用紙として用いられるなど西山地域の代表的な産物としてよく知られていました。そこでここでは明治～昭和初期の資料を用いながら西山地域の和紙生産の具体的な様子についてみていきたいと思います。

和紙作りの村

西山地域の代表的産物の和紙ですが、必ずしも西山地域全域で作られていたわけではありません。『長野県町村誌』をみると和紙を生産する村は裾花川流域沿いの鬼無里村・栃原村・祖山村と、善光寺の北西部に位置する富田村・入山村で、そのほかの村はこれらの村に和紙の原料となる楮こうぞを供給する役割を担っていたことがわかります(下図)。

和紙を作る村と原料を提供する村に分かれていた理由として、原料を提供している村からすれば、和紙の製造には専用の道具と技術を要するため、簡単にできるというものではなかったこと。また、原料である楮は土止めとして田畑の畔に植えることが多く、それほど手間を掛けずに栽培することができたので、和紙より値は安い原料である楮を売った方が簡単に収入を得られるということがあったと思われます。一方、和紙を作っていた村のうち、特に主産地の栃原村は年間に4万9100束(1束＝約400枚)もの生産高をあげていたため、自村だけでは原料が足りず、近隣からの原料供給が不可欠でした。このように和紙を作る村・作らない村双方の利害が一致していたことが理由として考えられます。



▲黄色の矢印が楮、赤色の矢印が和紙の物流を示す。(『長野県町村誌』より作成)

帳簿からみた和紙生産の様子

西山で作られた和紙は長野町に出されていましたが、その窓口となったのが西山への入口に位置する西長野町や桜枝町などに店を構えていた紙問屋でした。これから紹介する資料は、西長野町に店を構えていた須田紙店の帳簿です。これらは平成12年に博物館に寄贈されたもので、明治後半から昭和初年にかけての紙問屋の経営の一端がうかがえる貴重な資料です。

帳簿の中で、西山地域の紙漉き農家との取引を記したのが「山方差引帳」です。明治29年からのものと明治32年からのもの、大正9年からのもの計3冊が残されています。帳簿は紙漉き農家の家ごとにページが分けられ、それぞれ和紙の納入と代金の支払いが時系列に記されています。その取引人数は明治29年が28人、32年が34人、大正9年が41人と年が経つにつれ増加していきませんが、明治32年の帳簿に載る34人中28人は29年の帳簿にも載っており、同じ農家と継続的に取引を行っていることがわかります。以下、この帳簿からわかることをいくつか挙げてみましょう。



▲須田紙店の帳簿

代金の支払いはいつでもOK

具体的な付き合いの内容まではわかりませんが、農家が作った和紙に対する代金の支払い方法は、現在のような製品の納入実績に対しての支払いではなく、問屋が農家に代金を前もって渡し、後に製品を納入させるという形態でした。しかも代金の前渡しはある時期に一括で払うというのではなく、農家がお金が必要な時にその分だけ問屋が用立てるといったイレギュラーなものでした。帳簿ではそれを「釜代」と記しています。そして年に2度の締めの日、納入した紙の価格の合計から農家にこれまで渡した金額を差し引き、残金を紙代として農家に支払います。このとき問屋が紙代に対して余計に多

くお金を農家に支払っていれば、農家は余計にもらった代金分の和紙を納入しこれを相殺しました。このような金銭のやり取りは、お互いの信用関係が強くないと出来ないものです。

紙を漉いていたのは冬場だけではなかった

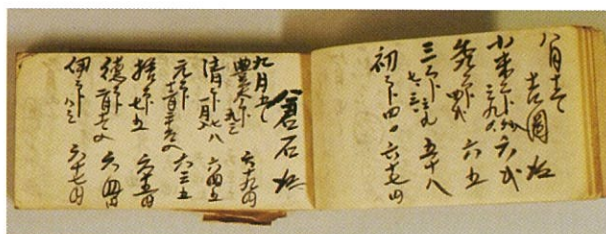
明治32年の帳簿から、山口長左エ門と林部藤太の年間の和紙の生産量を須田紙店に紙を納入した月別にまとめると、2人とも冬から春にかけて、また林部藤太においては9月と11月を除くすべての月で紙を作っていたことがわかります。

紙漉きというと雪が多くて外で仕事ができない冬場の仕事と思われがちですが、少なくとも明治頃は収入の大きな柱として冬場以外でも積極的に作られていたことがわかります。

漉く人によって出来に差があった

帳簿のうち、昭和4年の「見本出控」は、取引先の小売店などに商品の見本をいくつ卸したのかを書き留めたものと思われます。そこには下の写真のように「豊太印、清印、元印、捨印、徳印、伊印」といった商品名が記されています。これと大正9年の「山方差引帳」に載る紙漉き農家の名前を合わせてみると、これら商品名の中にある豊太、清、元といった文字は紙漉き農家の名前をとったものであると考えられます。

紙を一定の厚さに均一に作るには、ある程度の技術を要しました。須田紙店が抱えていた30～40人の紙漉き農家の中でも、当然技術の習熟度による製品のばらつきがあったと思われます。そのような農家ごとのばらつきに対して須田紙店では農家ごとに等級をつけて販売価格を決めていたようです。



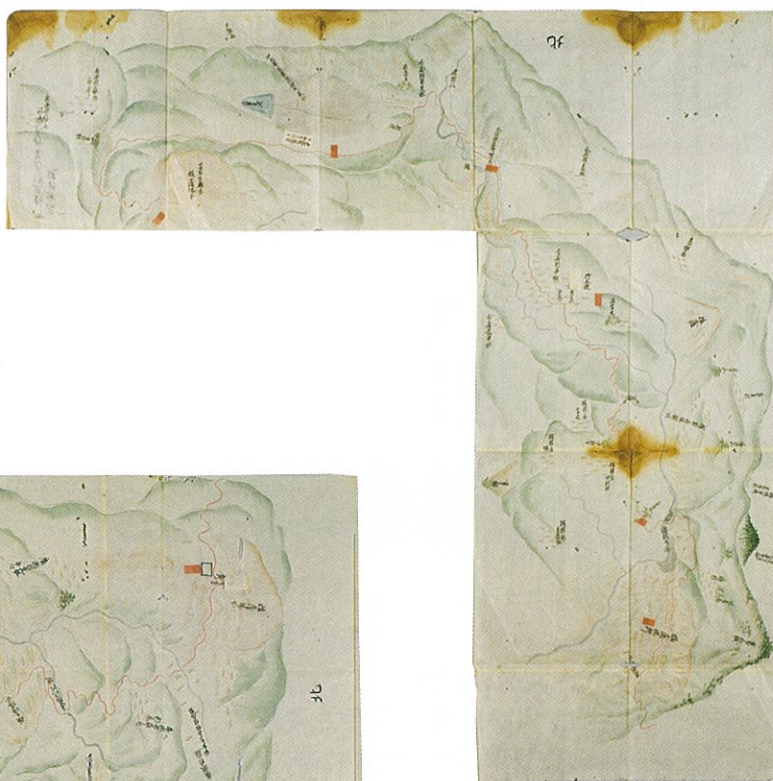
帳簿からは、和紙という産物を介した、町の問屋と山の農家とのつながりの具体相をうかがうことができます。
(細井雄次郎)

▶第1図：丹波島宿から広瀬村方面へ向かうルート図



▲絵図と帳面の入った袋

▶第2図：山中に入り、広瀬村へ向かうルート図



◀第3図：広瀬村内のルート図

松代を出立した藩主一行は、丹波島を通り善光寺へ通じる北国街道を西に折れ、山間地へと向かいます(第1回)。この絵図で特徴的なのは、必ず山崩れなどで被害の大きかった場所で休息を取っているということです(第2回、第3回)。すなわち、この御野掛の目的は、山間地の地震による地すべり被害を藩主自ら確認するためのものだったと言うことができるのです。

この御野掛に同行し、藩主に震災の様子を絵として上呈したものに青木雪卿が描いた『感応公丁未震災後封内御巡視図』があります(真田宝物館蔵)。この図の終わりの場面には、広瀬村の様子を描いた部分があります。これを次に掲げましょう。



両者ともに広瀬村ですが、上は山崩れが激しかった山間地を描きます。下は平坦地ですが、水田が整備され、震災前の状況にまで復興している様子がわかります。地震から程なくして、水稻耕作はある程度旧態に復したものの、山崩れにより傷ついた村の復興はままならなかったことが読み取れます。

この事実をどのように考えたらよいのでしょうか。現在、山間地は生産の拠点という性格が失われつつあります。しかし江戸時代にあっては、藩主自らが3回にわたって巡視する、そんな意味合いを待つ重要な場所であったと言えるのではないでしょうか。

江戸時代の大災害から、西山地域の姿がなんとなく浮かんでくるのです。(原田和彦)

表紙の解説

まきのしま

牧島村絵図

まきのしま

牧島村は、長野市信州新町にあった村です。戦国時代には、^{まきのしまじょう}牧野島城がつくられました。甲斐の武田信玄はこの城を拠点として山間地域の支配を推し進めるのでした。ところが、江戸時代になると、この城は廃城となります。城を中心としてつくられた武田氏の拠点が、山村のひとつとなるのです。

この絵図を見るといくつかのことに気がきます。まず、絵図の中にはっきりと牧野島城が描かれていることです。三日月堀といわれる丸馬出や、本丸などの縄張りをはっきりとわかります。

また、城下町、もしくは宿場町のような街並みも確認できます。この町並みを通る道は一直線ですが、両方の入り口ともに鍵の手になっており、また、大きな石によって防御されているようにも見うけられます。この絵図から断定することは難しいかもしれませんが、おそらくは、武田信玄が牧野島城をつくったときに、あわせて城下町、宿場も整備したのでしょう。

時代が下って、平和な時代である江戸時代になると、戦国時代の町をそのまま踏襲して人々が生活したのです。かつては城下町として栄えた牧島村も、江戸時代には山間地の村へと変化を遂げた、そんな村の歴史を、この絵図は伝えていると思うのです。(原田和彦)

博物館のHPアドレス

<http://www.city.nagano.nagano.jp/museum/>

長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島田町1414
TEL:026(284)9011

戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠栃原3400
TEL:026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659
TEL:026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3
TEL:026(262)3500

ミューゼ蔵

〒381-2405 長野市信州新町37-1
TEL:026(262)2500



▲長野市立博物館
携帯サイト